

patient & school nurse

R18
adult only

保健室の常連。病弱女子「患者さん」

自己肯定感の低い保健医「先生」

患者さんと先生

～幕間にやり直しを～



創作男女 × TL

患者さんと先生
～幕間にやり直しを～



愚者さん

創作男女 x TL



前回のあらすじ

病弱な女生徒「笹五位 月子」は入学直後に
保健室の先生である「石流先生」に助けられる。

先生に不信感を抱いていた月子だが、
2度も助けてもらったことにより信頼を置くようになった。

2人はある日、お互いに「自傷行為をしている」という秘密を知り、
急速に接近していき惹かれ合っていく。

先生は今まで隠していた秘密を月子に受け止めてもらったことにより、
月子に理想を抱くようになり、夢にまで見るようになった。

そして、夢と現実の境目が分からなくなった先生は、月子に強引に迫り――。

「患者さん」と「先生」の関係が始まる。

pixivにて前作
「患者さんと先生 幕開け編」の
一部ページ(約20P)が読めます→



先生

自己肯定感の低い保健医。
30歳独身。メンタル極悪
ハードリストカッター。
基本的に他人には優しい。



患者さん

保健室の常連・病弱女子。
「患者さん」は先生が付けたあだ名。
ひよんなことから先生と
付き合うことになった。

第一印象は

ヘラヘラした人

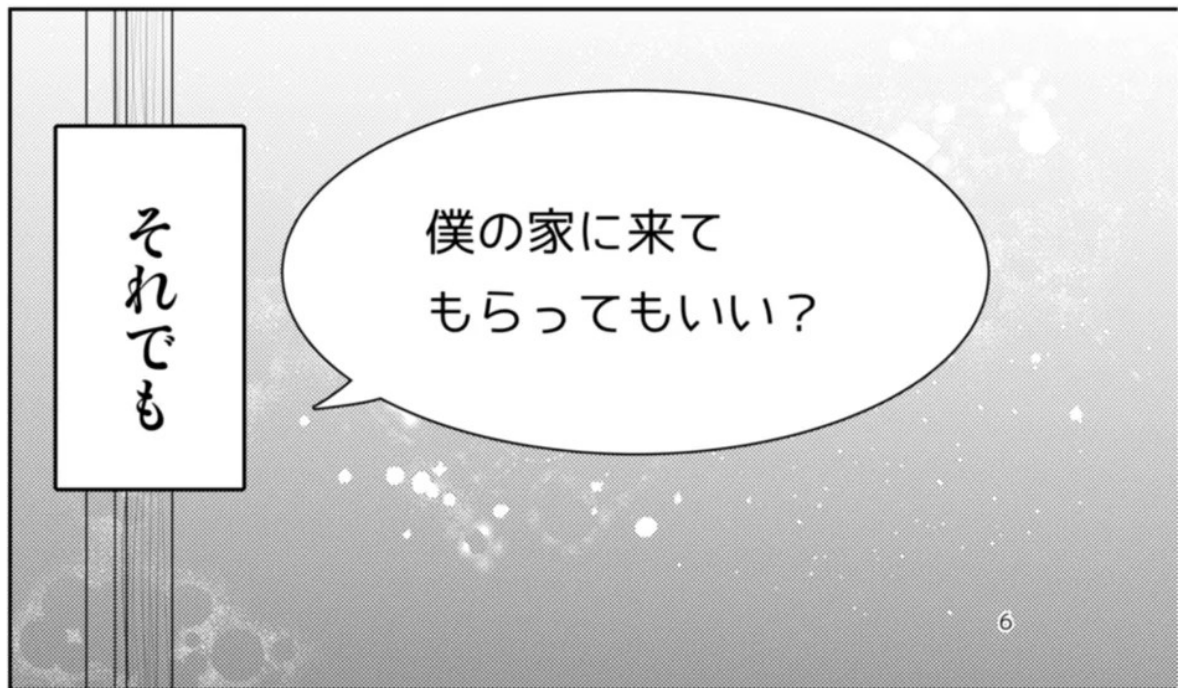
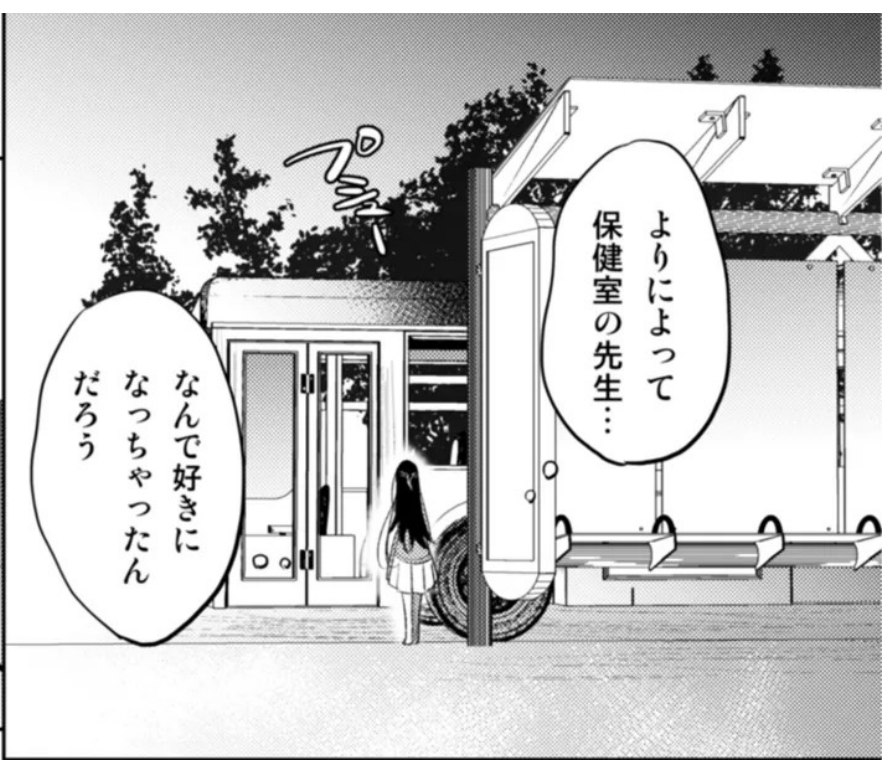
でも本当は

思いやりのある
慈悲深い人で

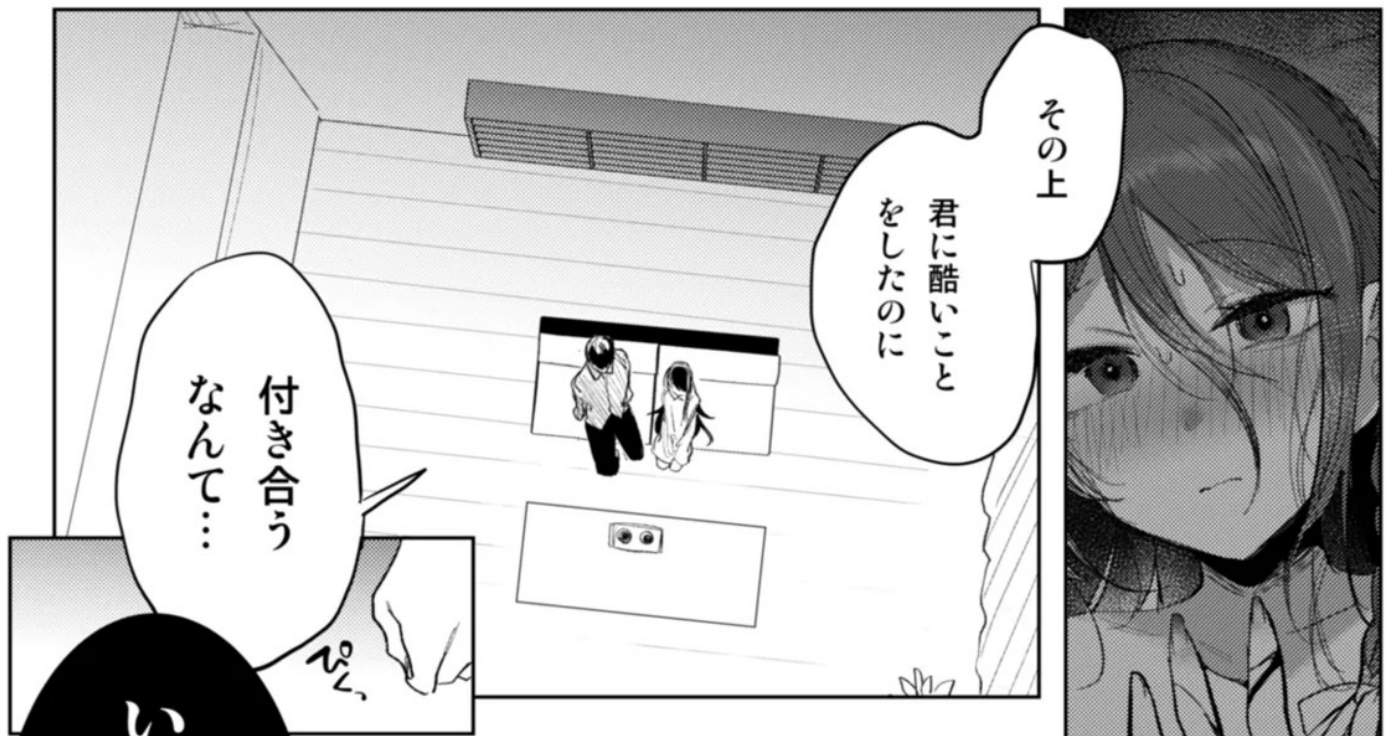
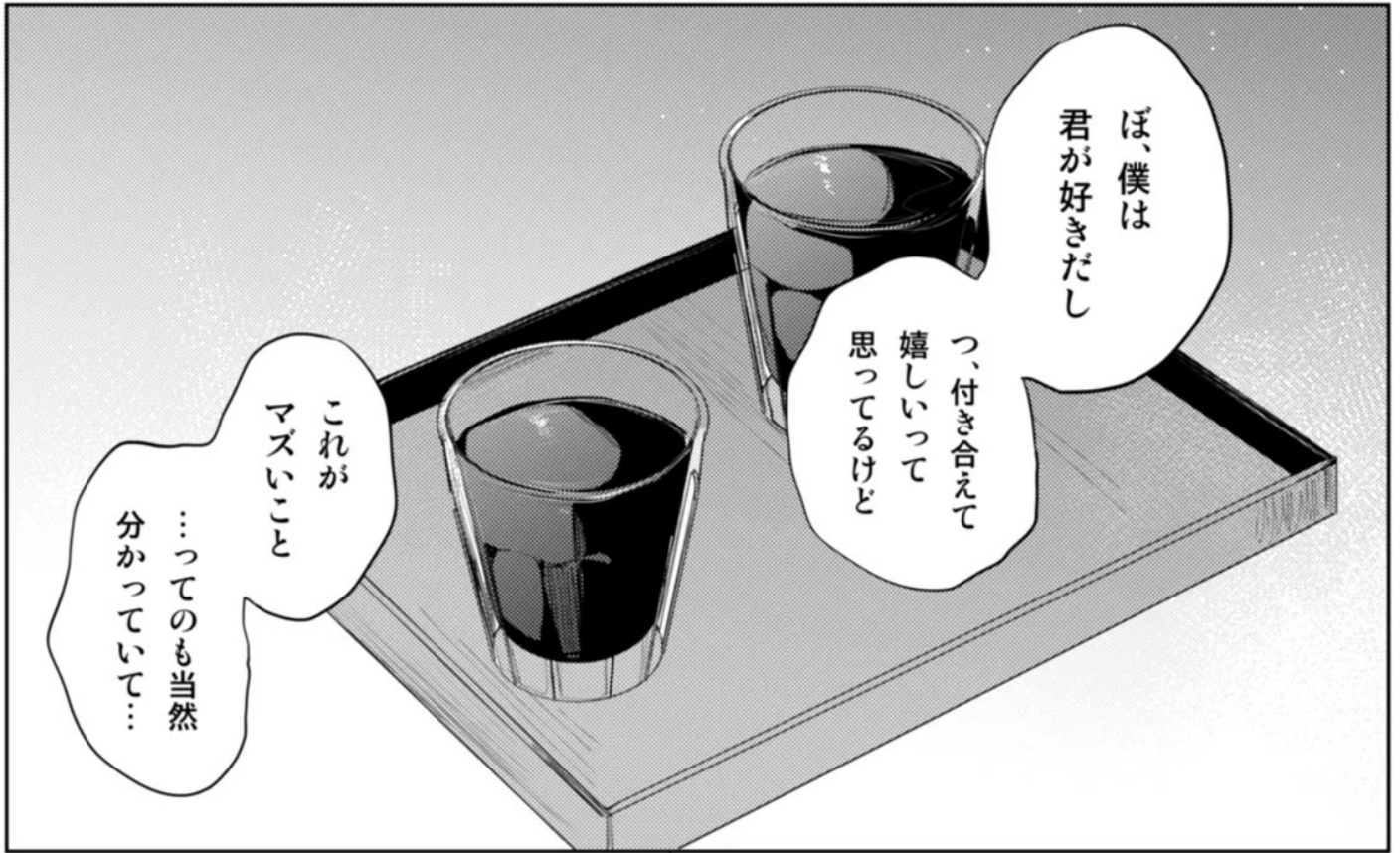


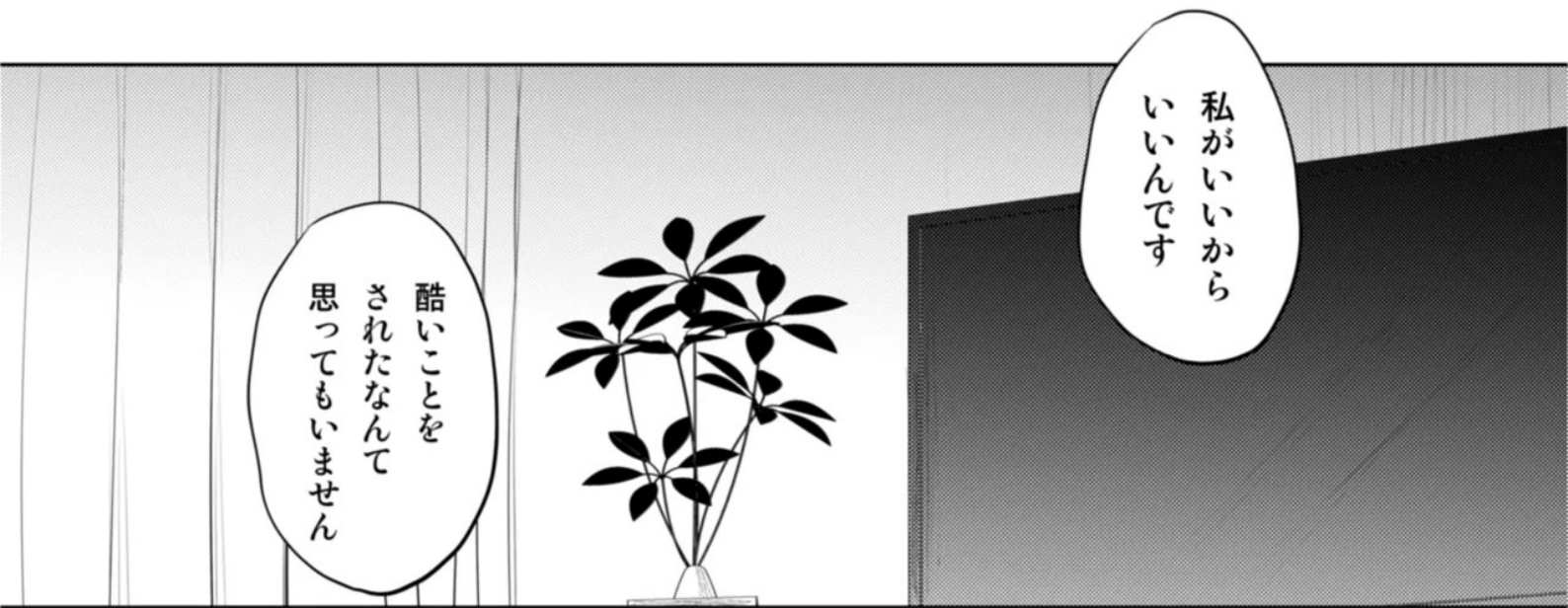
自分を大事に
できない人













私だって

先生のことが
好きですから!



それに



11




き、今日は

ちゃんと

準備
してきたん
ですよ…?





先生が私に
酷いことをした
と思うなら

最初から

やり直し
ませんか…？



もしかして

僕に見せるために
かわいいの
選んできたの？



は、はい…



後悔…



はじめての
時くらい

かわいいの
着けておけば
よかった…って

後悔
して…



この前は
ごめんね

優しくして
あげられなくて



でも...

そ、それは
はじめて...
だったから
しょうが
ないかと...

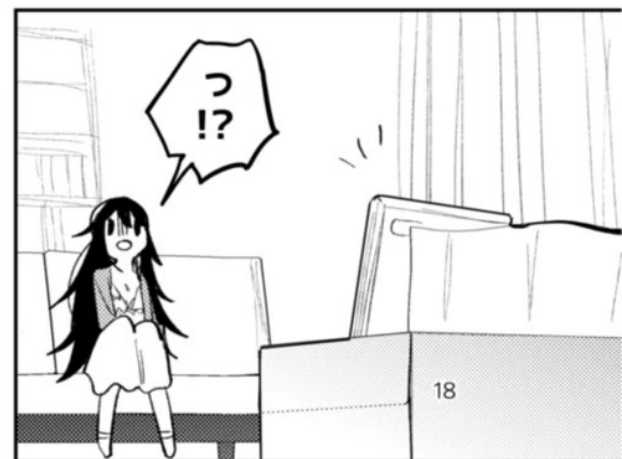


出血まで
させて...
僕も後悔
してる...



あ







性教育の
課外授業です

保健の先生
タ〜イム



反応
かわいいな…

って
いかに
いかに…

えーつと…



よっ…

わんわん…



せ、先生…っ





どっち…？

患者さん
どっちにする？



入口を広げるか
潤滑を良くするか
ワキ
という感じ
なんだけど…



それとも器具…
とか？

引っ張る…？

入口を広げるって
どうするんだらう

ぽんやり…



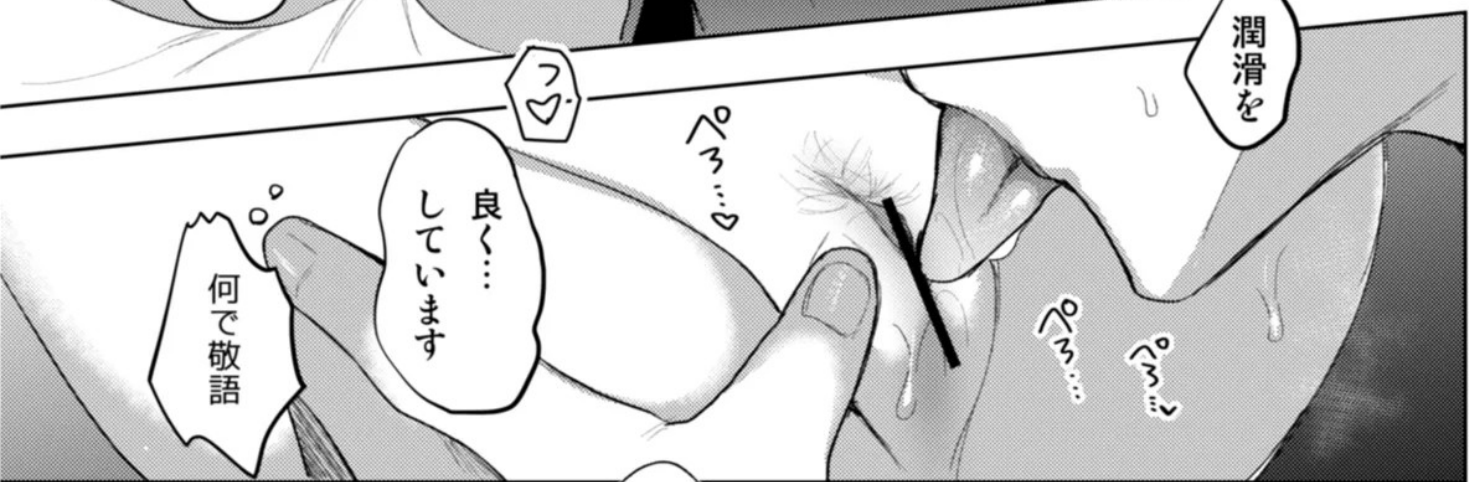
分かった

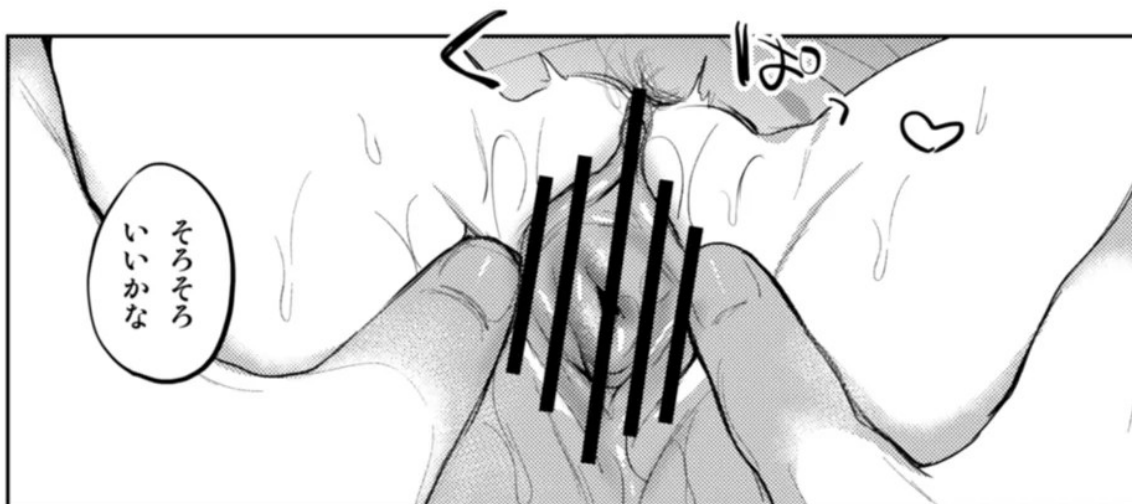


じゃあ潤滑を
良くする方で…

潤滑を
良くするのは
なんかヌメツと
したものを付けたり
するんだよね…？
ゼリー？
ローション？
だっけ…

少女漫画と小説の
知識のみの性知識











先生...
好き...

キス
おねだりするの
ビュアで
かわいい...



私...



患者さん
ごめん...
我慢
できない...



あ...

先生に私を
求められて

うれしい…

うれしい…♡



先生……♡

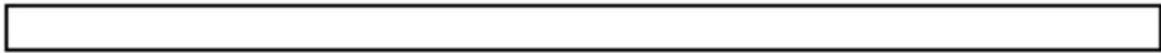


先生

先生……



—好き…







先生だって
この関係…

バレたら困るって
分かってると
思うんだけどなあ

先生と
付き合ってること
迂闊に
バレないように
気を付けないと

見つかったら
大変…


先生のお家に
行くのはいいん
だけど…



先生って
結構
寂しがりやさん
なんですね

ん…





誰もいない中で
一人なのと

誰かがいる中で
一人なのとじゃ
わけが違うでしょ？

ああ

そうか



これで
もう一人じゃ
ないんだ…



大事な
ことを

好きだよ

患者さん…

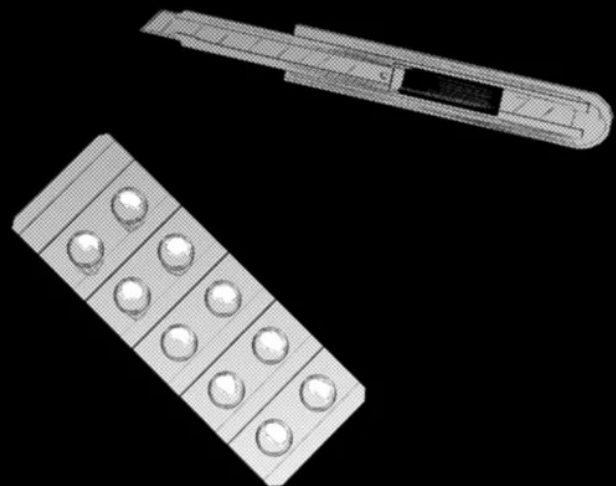
見落として
いるような






先生って
どうして

自傷してる
んだらう





患者さんと先生本4冊目でした。
次は旅館本かファンタジーパロ本か
保健室本を作りたい…。作りたい本いっぱい！

そして今回、デザイナー様に
タイトルロゴを作っていただきました。
machi様、ありがとうございました…！
ゴシック調でかわいくて気に入っております。

発行 a.m.

発行人 御膳

2024年8月 COMITIA149 初版発行

印刷 栄光様

nakahashimizuki@gmail.com

[twitter \(X\) @am_is_gozen](https://twitter.com/am_is_gozen)

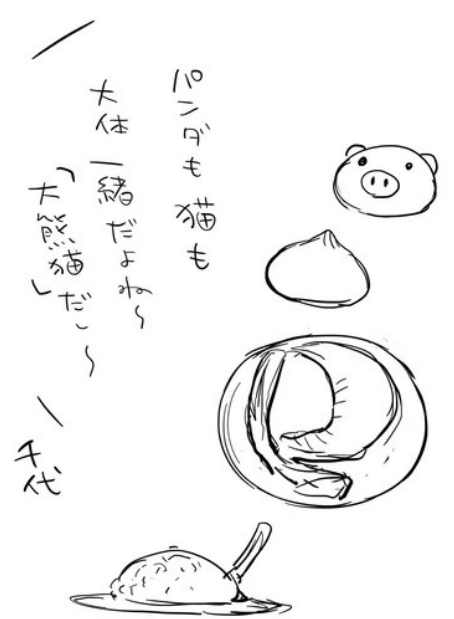
[pixiv 3896141](https://www.pixiv.net/member/entry.php?pid=3896141)

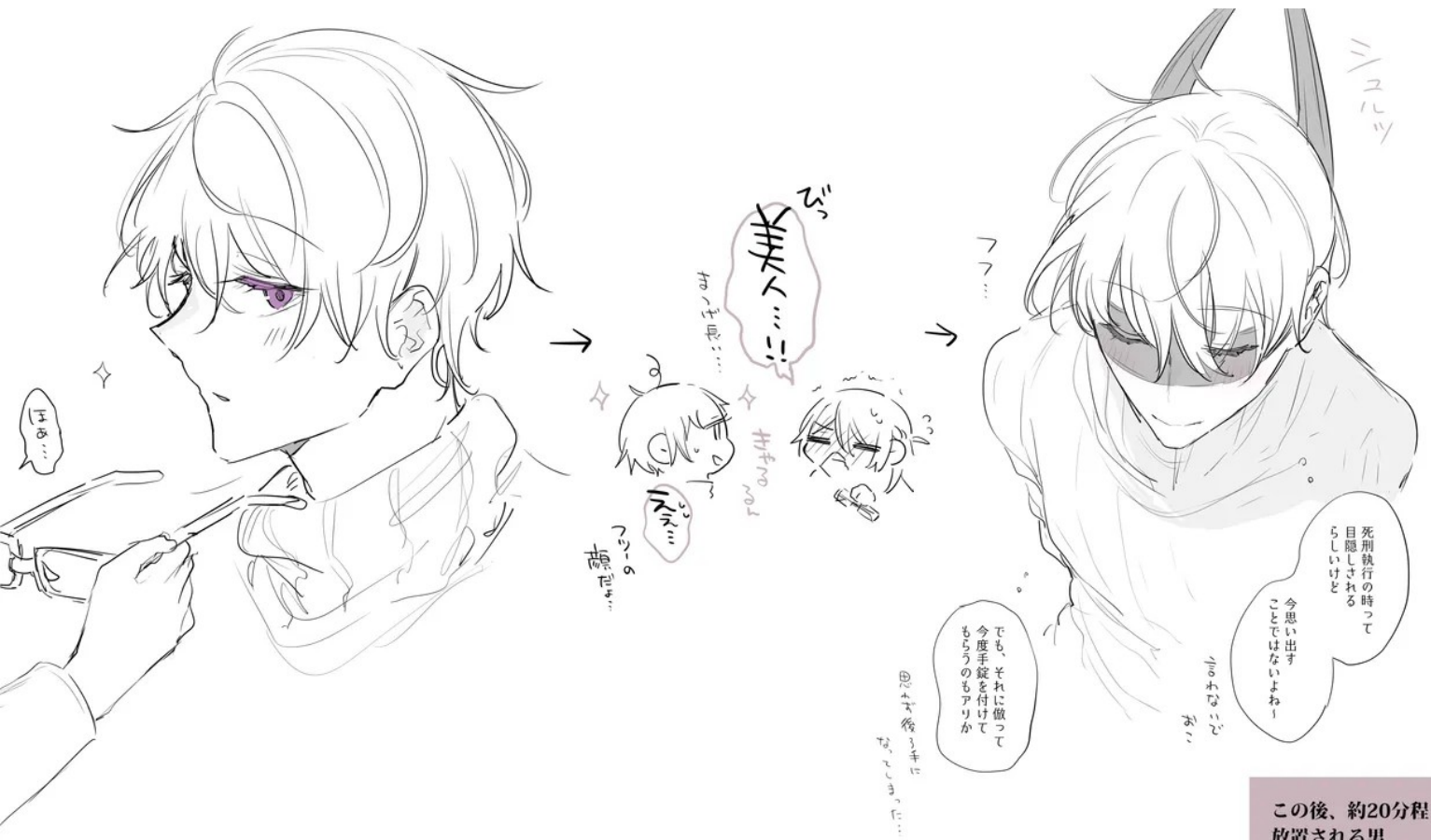
患者さんと先生
～幕間にやり直しを～





2024/08/18 COMITIA149





この後、約20分程
放置される男

おは、おは、おは



患者さん



おは

患者さん (ガチ)



おは、おは、おは

強引なおねだり

「せ……っ先生、これ以上は……だめ……え……」

「何でそんなこと言うの？」

患者さんの身体を両の腕でしっかりと抱き締めて逃げられないようにしながら一定のリズムで腰を揺すり、膣奥へと刺激を与える。逃れようとしているのか必死に腰を浮かせたり足をばたつかせているが、大人の男の力に抵抗できるわけもない。為す術もなく僕の動きに流されるままだ。患者さんの奥底に僕の先端が遠慮なくぶつかる度に、か細く鳴いているような高く掠れた喘ぎ声が僕の耳をくすぐってくる。正直たまらない。

「さっきいった……から……っ、奥、とんとんってされると、なんか……キチャイそうで……っ……た、保てなくなります……う……っ」

「僕だっていった、イかせられた」
抜こうとしたのに強く締め付けられて。いつになく強引な患者さんに面食らっていたのだけれど。

「次は僕の番。やめてって言うっても止めてあげない」

「も、もしかして先生、ちよつと怒ってます……？ ……っ!? ひゃ……っあつ……っあつあああつ……っ♡」

「僕の、おねだりしちゃうくらいよかったですよ？」

打ち付ける力を強めたら、先程より一段と強く締め付けてきた。そんなにいいんだ僕の。そんなに、僕が。

「もう一回出してあげるから、逃げないで」

わがまま

「ひっううううう……っ♡ あぐ……っ♡ あっ♡ ああっ♡
♡♡♡ んうううううっ♡♡♡」

幾度となく吐精し、お互い頭がどうにかなってしまっていた。「外に出す」なんて考えはとくにゴミ箱の中である。気持ちいいのだから、人間の本能なのだから、仕方がないじゃないか。求められているものを与えて何が悪いんだ。もう一度深く抉り込み、空っぽになるまで奥に放つ。

「っんあっ……♡ ああ……っ♡♡ ひあああああっ♡」
「そんなに声出るほどいいんだ？ これ……」

患者さんの嬌声が保健室の外に響かないよう深く唇を重ねる。「……っ♡♡♡ ちゅっ♡♡ ちゅううっ♡♡ うああ……っ♡♡ ぐんうっ♡♡ ぶはっ……♡♡ せんせっ♡♡ せんせえ……っ♡♡ ごめ……っ♡♡ ごめん……っ♡♡ せんせえ……っ♡♡ なさいっ……♡♡ 声出て……っ♡♡ おねだり、して……っ♡♡ ……わっ、わがまま、言っ……っ♡♡ ……っ♡♡」

どうやら火に油を注いでしまったらしい。膣内を上下にうねらせまた僕の身体から搾り取ろうとしてくる。普段は大人しく淑やかでいやらしさを感じない、まだまだ発育途上の少女だというのに。一皮剥けば既に女性として完成されているのだから驚きだ。

「……ああは言っただけ。患者さんにわがまま言われるの嬉しいから、いいよ」

僕は患者さんの小さな背中を優しく撫でて抱き寄せた。

「だから僕のこと、ずっと必要として」

当てる

「先生っ……当たってる……っ」

「ん……？ 何が？」

「どうか、とぼけないでほしい。」

先生の履いているデニムと私のスカートの布地を貫通しかねない硬さを持ったそれが、私の下腹部を無遠慮に押し付けていた。先生の体重がかかっていることもあり、それこそ挿入されている時のような圧迫感がある。「怒張」なんてよくできた表現だと思う。こんなに張って……痛く、ないのだろうか。

「お、男の人ってキスしただけでこうなるんですか……？」

生徒が突然保健室に入ってきてもおかしくないお昼休み。いくら何でも事を始めるわけではないと思うのだけれど、心配になってしまう程の強張り加減だった。

「……興奮しないわけじゃないでしょ、好きな子にキスしてるんだから。患者さんは興奮しないんだ？ 微塵も」

「う……」

そう問われると、完全には否定できない。先生は返答に窮している私をニヤついた目で見て、スカートの裾に手をかけた。

「言葉で教えてくれないなら、実際に確かめてもいい？」

「ぜ、絶対にダメです!!」

「確かめてみて、患者さんが僕と同じくらいに興奮してるって分かったら……うれしいのに」

今見られたら、触られたら、先生に「押し付け」られ火を着けられたことがバレてしまう。それを知った先生はきつと、一段とニヤついた目で私を見てくるのだろう。

猫のよう

放課後を告げるチャイムが鳴る。患者さんはまだ起きてこない。

「患者さん」

一声かけても応答はなかった。渋々ベッドカーテンを開けると、そこにはベッドの上で綺麗に丸まった——さながら猫のように丸まった患者さんが寝息を立てながらスヤスヤと眠っていた。

「あらかわいい」

うっかり女性的な口調になってしまった。

「困ったな……」

起こすのも躊躇うほどの猫らしさだ。

本物の猫であれば体全体を抱き抱えて別の場所に移すこともできるのだけれど。患者さんは小柄で細身な体躯とはいえ、僕は易々と少女を担げるほど屈強な人間ではない。

「……う……ん」

とりあえず、頭を撫でてみたり。

「ん……」

頭から肩へ、肩から背中にかけてゆっくりと撫でる。心なしか患者さんの表情が穏やかになっていく。猫も背中を撫でられると気持ちよさそうに喉を鳴らすものだ。そのまま背中から腰を撫で、腰から臀部に差し掛かりそうなタイミングで、急に患者さんの目が開いた。慌てて手を離す。

「……先生、悪い顔してますね。何かイタズラしてませんか？」

飲むの？

「んっ……っ……!!」

患者さんは僕のモノを頬張ったまま離さない。もういいよ、という合図のために背中をトントンと叩くとようやく口を離した。

「えう」

すると、よだれと白濁した液体が患者さんの口元から垂れてしまった。

「あっ！ ごめ、ごめん患者さん……!!」

思わず謝る。そうか、だから口を離せなかったのか。しかし患者さんの表情は至って冷静だ。

「あも、ほれって……ろんれ飲んでも大丈夫もらいじよーぶ、らなんですかんですか」

「の、飲んでも害はない……と思うけど、おいしくないだろうからペってして！」

慌ててティッシュを数枚取り患者さんに手渡そうとするも、ごくんと飲み込んでしまった。

「あっっっ!!」

間に合わなかったのか興味本位で飲んでみたのか、僕が抜き取ったティッシュは使われることなく患者さんのスカートめがけてはらはらと落ちた。

「ん……先生が喜んでくれたから、つい飲んじやいました」
そう言われると何だか照れるものがある。

「ふふ……もっとお口で、してあげましようか？」

先生の体が動く度にぶちゅ、ぶちゅと水音が漏れる。完全に抜き切ってまた挿入してを繰り返されていく内に「穴」の空いた部分に溜まった空気が下卑た音を否応なく立てるので、私は堪らず目をぎゅゅとつむり恥ずかしさに打ち震えた。

「普段大人しくてか弱くて、線の細い患者さんから聞こえる音とは思えないな」

「い、言わないで……っ……ください……っ」

先生は私をからかったわけではなく、純粹に思ったことがただ漏れ出ただけなのだろう。それこそ、先生はこんなこと慣れっこなのだろうけれど、私は……。

「空想の中で抱いていた時とは大違いだ。現実は何もかも超えてくるね」

「抱っ……!?!」

今、聞き捨てならないことを聞いた気がする。

「しまった」

「どどどういうことですか、先生」

「……言葉通りの意味だよ。は、恥ずかしいから、もう掘り返さないで」

「そんなこと言われたら尚更気になっちゃいますか……!?!」

びゆるるるっ♡どくっ♡どくっ♡びゆくっ…っ♡

(あっ……またっ…中に、きて……っ♡)

先生から放たれた精液が勢いよく私の身体の中に流し込まれてゆく。ただでさえ容量の少ない小さな器だ。

簡単に決壊してまるで粗相をしたかのように太ももに、お尻に、スカートに垂れていった。

子供の作り方は授業で習っていたし、少女漫画やえっちな小説でも描写されていたから、決して無知ではなかった。年相応の知識はある。何なら、耳年増と言われても強く否定はできない。

(でも…っこんな…っ♡　こんな…の…っ…っ♡　ああ……っ♡)

知る由もなかった。授業で学んだこと、絵や文で知っていたことと現実の感覚がこんなにも乖離しているなんて。

(覚えちゃ、ダメ…っ…っ♡　こんな、こんな……っ
きもちいいの…っ♡♡)

(戻れなくなるっ…っ♡　戻れなくなって、私、普通じゃ、なくなっ…っ…っ♡)

——ああでも。普通でいられないのなら、いっそ…。

(それでも、いいのかも……っ♡)

決壊

飽きることなく何度も何度も抽挿と射精をねだり、数度目の絶頂を迎えた頃。

先生も私も体力が尽きて、文字通り精も根も尽きて、身動きが一切取れなくなってしまった。当然の帰結だ。体は絡んだまま、愛液も精液も流れ出たまま、重力に逆らうことなくベッドに体を預ける。言葉を交わさず、息を整えるだけで精一杯のまま数分が経ち、ようやく先生の口が小さく開いた。

「…………大丈夫？」

「た、多分…？ 制服とシートが終わってしまった気はしますが、それ以外は何とか。せ…先生も、大丈夫…ですか？」

私の体に回していた先生の腕がぎゅうっと締まる。

「夢みたい」

「え？」

「大丈夫なのかな、僕は」

今にも泣き出しそうな顔をするものだから、私も負けじと先生を抱きしめ返した。

「…………大丈夫ですよ、大丈夫です」

おしまい

「前、失礼します…ね」

その声と共に視界が暗くなる。目隠し用の黒い布が僕の臉の上にゆっくりと乗り、後頭部の中央できゅっと結ばれた。遮光性が高い布ではないから薄らと光が漏れてくるのだけれど、メガネをしていないこともあつてか辺りはよく見えない。目隠しとしてきちんと機能していた。

「は、背徳感がすごい……」

布を結び終えた患者さんの一言で思わず吹き出してしまいそうになったが、そこは堪えた。つい先日、君も全く同じ格好だったんだよ。

「手も、結ぶ？」

僕は、自然に後ろ手になっていた腕をぶらぶらと上下させる。患者さんの姿は見えていないが、声のする方向からして恐らくまだ背後にいるのだろう。身じろいだのか衣擦れの音が微かに聞こえた。

「そ、そこまですると、その、可哀想……」

動揺していたようだった。可哀想……？

「どうしてそう思うの？」

「ぎ、罪人、みたいで」

「じゃあ僕にピッタリだね」

目隠し

攻めるのは好きだけれど攻められるのは苦手だ。
ふとしたタイミングで、心構えもしていない時に終わ
って、もう次はないんじゃないのかと見捨てられたよ
うな寂しい気持ちになるのが目に見えているから。

——だからといって。

「患者さん……どうしたの？」

目隠しを着けてから体感で数十分程経過した。僕は、
ものの見事に放置されていた。

「あ……っ」と小さく驚いた声が聞こえて、ああよか
った、まだそばにいたのだな、と安堵した。それ程ま
でに、患者さんの声も動きも察知できなかった。馬鹿
正直に目隠しを着け続けずとも、手は拘束されていな
いのだから外して確認すればいい話なのだけれど。

「何をすればいいのかと考えていましたが、その……」

「好きなこととしていいよ。僕は抵抗しないから」

少しの間が空き、「じゃあ」との呟きが返ってきた。
なんだ遠慮していたのか、微笑ましいな。そう思っ
ただけだ。

「……ちゅうう……っじゅるるるうう……っ♡」

「ひゃああああ!？」

突然左耳を犯され、情けない声が出た。

「視覚をシャットアウトするとその他の感覚が鋭敏に
なる……と先生が貸してくれた本に書いてありました
が、いかがですか？」

七夕

学校の玄関前に設置されている笹には既に数えきれないほどの短冊がぶら下がっていた。先生はそれを一つ一つ手に取って眺めては口元を緩ませる。しばらく眺めて気が済んだのか、先生は私に視線を向けて微笑みかけた。

「願い事、何にするの？」

私と先生の手には油性ペンと鮮やかな色の短冊。お互い、七月七日になるまで短冊に願い事を書いていなかったのだ。

登下校時と昼休み時には七夕コーナー前で生徒がごった返していたので、非力な私は近づきさえしなかった。なので、殆どの生徒が下校しているか部活動に勤しんでいる夕暮れ時に、こうしてようやく書けるようになった、というわけだ。

「健康にいられますように……ですかね。ベタでしょうか」

書いた短冊を先生の目の前に出した途端、いつものように

「あはは」とカラッと笑われた。ベタだったらしい。それか、私の考えることはお見通しなのかもしれない。自分の中で一番大事なことから仕方がない。

「先生は何にするんですか？」

「大切な人とずっと一緒にいられますように、かな」

「……私もそう書けばよかったですね」

「患者さんの健康あってこそだから、いいんだよ？」



メンヘラヤンデレ弱々保健医 x 病弱貧乳敬語女子

46P
+ex

保健室の常識・病弱女子「患者さん」

自己肯定感の低い保健医「先生」

R18
adult only

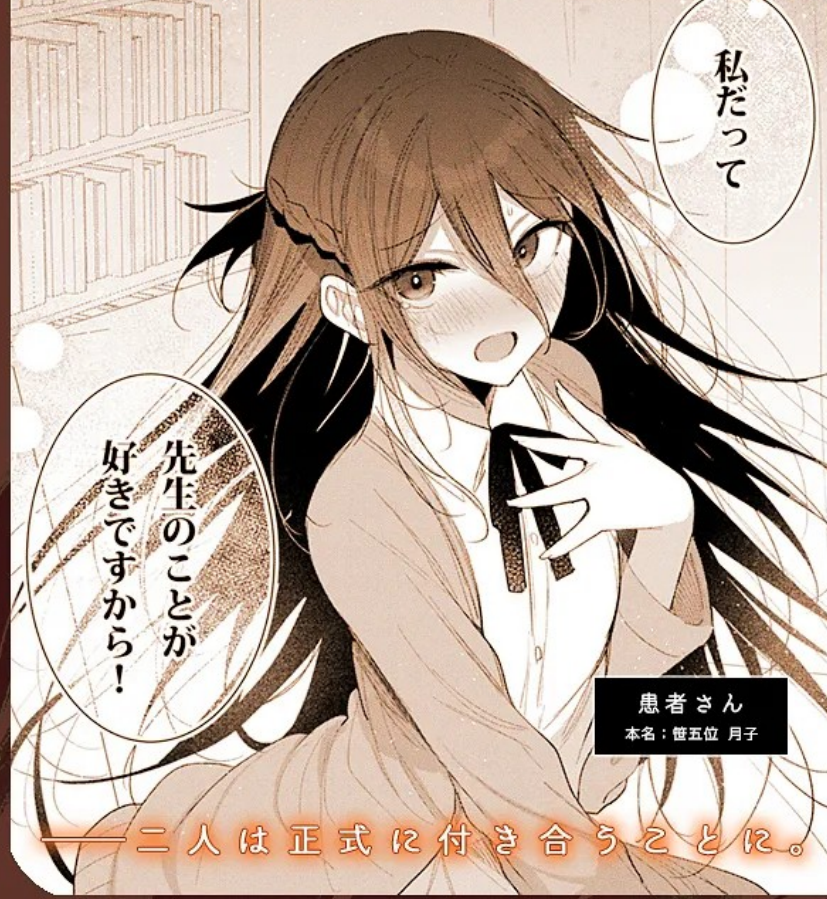
a.m. / 御贈

— これでもう一人じゃないんだ

患者さんと先生

～ 裕間に寄り添しを～





二人は正式に付き合うことに。

初めてのセックスを

ぎ、今日は

先生が私に
酷いことをした
と思うなら



ちゃんと

準備
してきただ
すよ...?

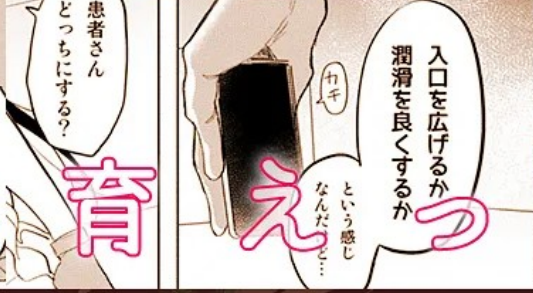
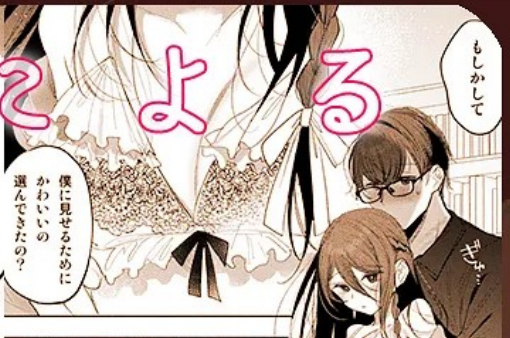
最初から

やり直し
ませんか...?

やり直す!



保健の先生による



性教育

救ったり救われたり、救われなかつたりする、

私

構生
寂しがりやさん
なんですね

誰もいない中で
一人なのと

誰かがいる中で
一人なのとじゃ
わけが違いますよ？

何か…

患者さんと先生の歪んだ幕間。



